

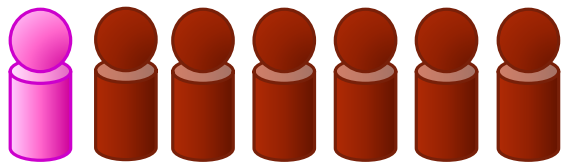
新規数抑制の取組の提案

教員の同僚性をいかした
「魅力ある学校づくり」の推進

中央教育審議会答申（平成27年12月） 「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」

①教員が行うことが
期待されている
本来的な業務

②教員に加え、
専門スタッフ、地域人材等が
連携・分担することで、より
効果を上げることができる業務

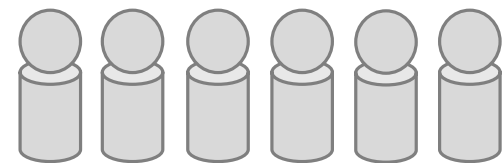


● 管理職、 ● 教員

①チーム学校 同僚性



不登校の取組



● + ●、 ● SC、 ● SSW

②チーム学校 多職種



不登校の取組

「魅力ある学校づくり調査研究事業」の目的



全ての児童生徒にとって魅力ある学校をつくる



どの学校も、全ての児童生徒を対象に、毎日、居場所づくり・絆づくりに取り組んでいるはず。

しかし、その取組が本当に児童生徒の多くに届いているのか、教師の印象と実態とのずれはないかを質問紙調査で検証し、結果に応じて取組を見直すPDCAサイクルを年3回繰り返す。

意識調査

P D C A

サイクル



26-27年度
18府県18市町
18中学校区

18中学校

58小学校

不登校数減少に向けて

取組の対象

主たる取組

2つの「チーム学校」

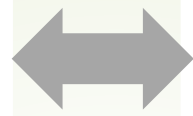
新規数を抑制する

前年度不登校ではなかったすべての生徒

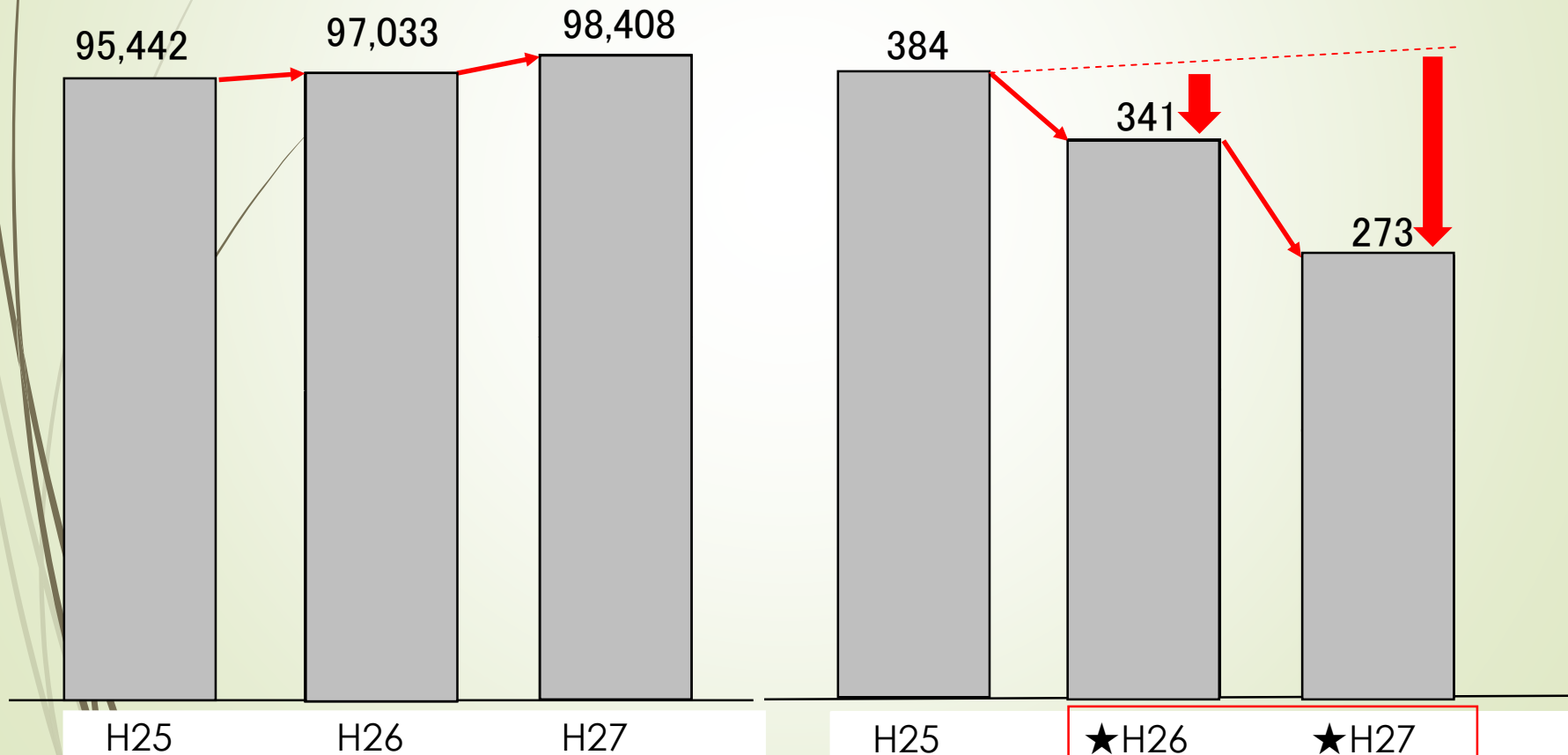
未然防止
集団指導

教員の同僚性をいかした「チーム学校」

全国中学校不登校生徒数
(文科省調査)

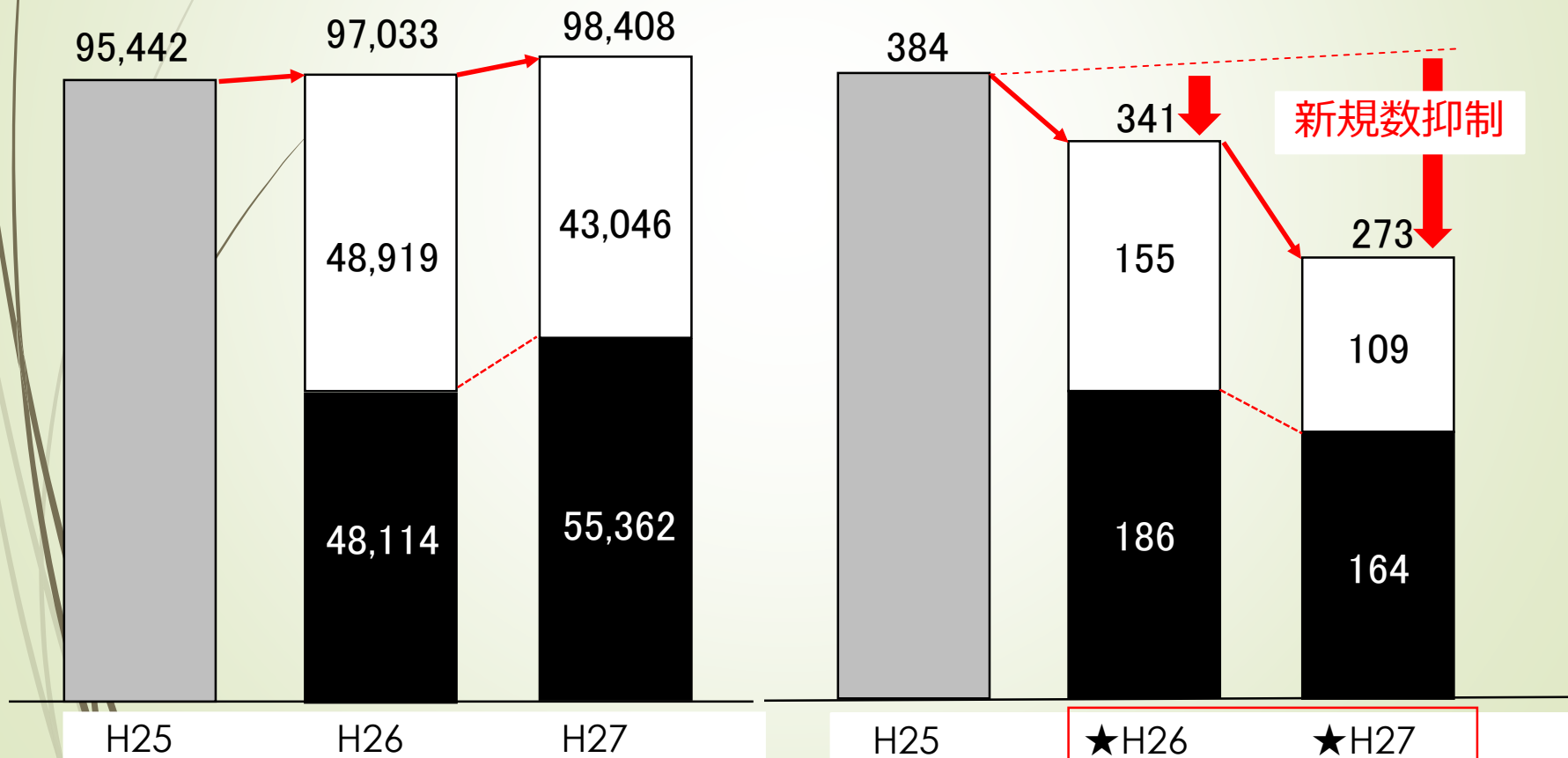


事業指定地域18中学校
不登校生徒数(文科省調査)



全国中学校不登校生徒数
 (文科省調査)

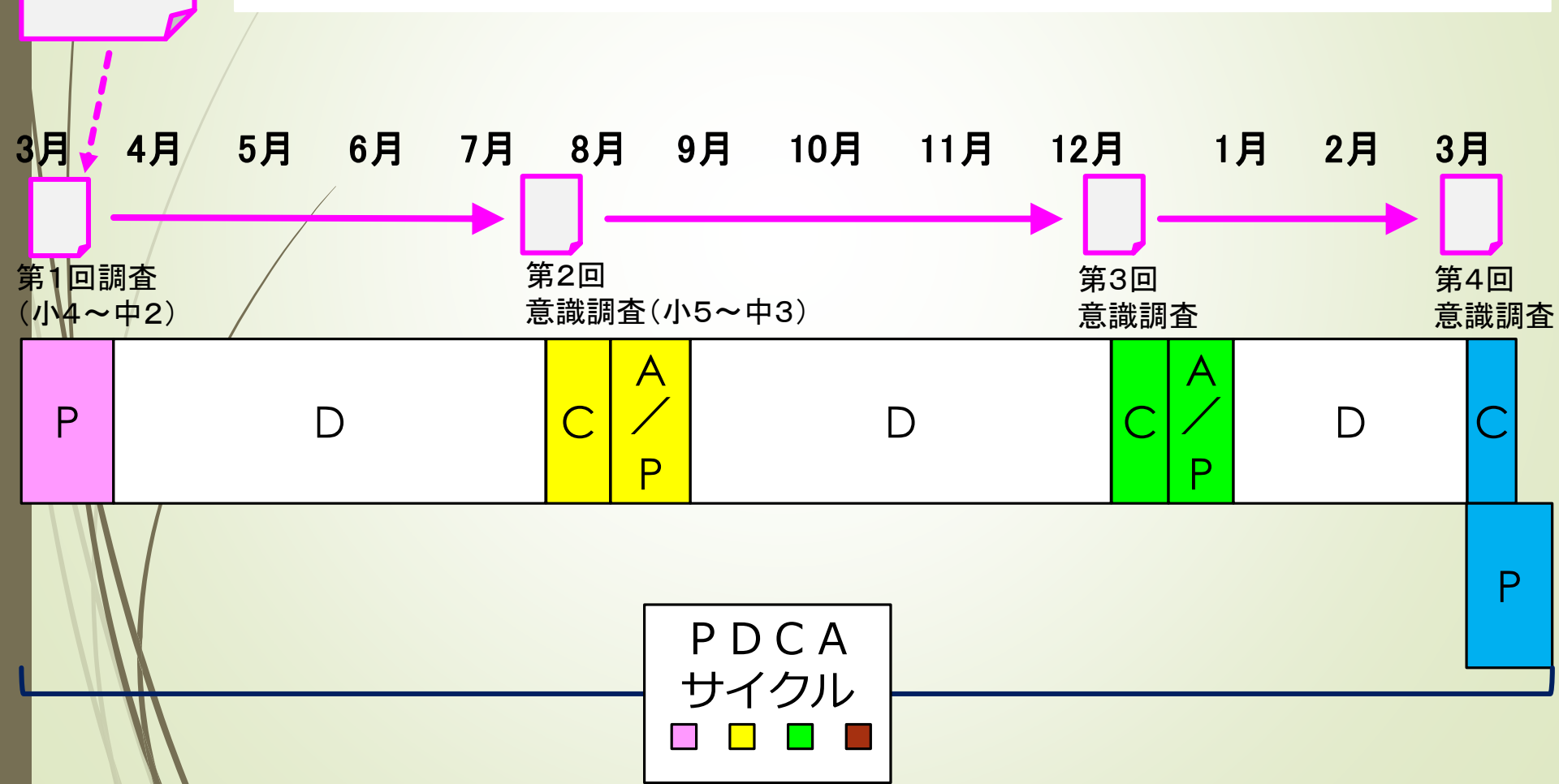
事業指定地域18中学校
 不登校生徒数(文科省調査)



6

意識調査

定期的に実施する「すべての児童生徒からのメッセージ（意識調査）」をもとに、学年教員全員でこれまでの取組を点検し、今後の取組を見直し、実行する。



教員が共通理解をすべきこと

なぜ、ア～エで、課題を分析し、目標を設定するのか。
意識調査は何を教えてくれるのか。

意識調査

意識調査（様式）

【共通質問項目】

※ア～クの項目の表現は修正しない。ア～エについては順序変更可。
※校区の実情に合わせて、ひらがなやルビ等を工夫。

現在の学校生活について、あなたはどのように感じていますか。当てはまるものを右の1から4の中から一つずつ選び、その番号に○を付けてください。

ア	学校が楽しい	1	2	3	4
イ	みんなで何かをするのは楽しい	1	2	3	4
ウ	授業に主体的に取り組んでいる	1	2	3	4
エ	授業がよくわかる	1	2	3	4

〈中学校版〉

4月【※実施時期に応じて9月、1月に変更】になってから今までに、次のようなことを、この学校の生徒からされたり、反対にこの学校の生徒にしたりしましたか。当てはまるものを右の1から4の中から一つずつ選び、その番号に○を付けてください。

オ	叩かれたり、けられたり、強く押されたりした（暴力を受けた）	1	2	3	4
カ	暴力ではないが、いじわるをされたり、いやな思いをさせられたりした	1	2	3	4
キ	叩いたり、けったり、強く押ししたりした（暴力をふるった）	1	2	3	4
ク	暴力ではないが、いじわるをしたり、いやな思いをさせたりした	1	2	3	4

〈小学校版〉

4月【※実施時期に応じて9月、1月に変更】になってから今までに、次のようなことを、この学校のだれか（お友だち）からされたり、反対にこの学校のだれか（お友だち）にしたりしましたか。当てはまるものを右の1から4の中から一つずつ選び、その番号に○を付けてください。

オ	叩かれたり、けられたり、強く押されたりした（暴力を受けた）	1	2	3	4
カ	暴力ではないが、いじわるをされたり、いやな思いをさせられたりした	1	2	3	4
キ	叩いたり、けったり、強く押ししたりした（暴力をふるった）	1	2	3	4
ク	暴力ではないが、いじわるをしたり、いやな思いをさせたりした	1	2	3	4

- ア 学校が楽しい
- イ みんなで何かをするのは楽しい
- ウ 授業に主体的に取り組んでいる
- エ 授業がよくわかる
- オ 叩かれたり、けられたり、強く押されたりした（暴力を受けた）
- カ 暴力ではないが、いじわるをされたり、いやな思いをさせられた
- キ 叩いたり、けったり、強く押ししたりした（暴力をふるった）
- ク 暴力ではないが、いじわるをしたり、いやな思いをさせた

4件法

- 1 あてはまる
- 2 どちらかといえば あてはまる
- 3 どちらかといえば あてはまらない
- 4 あてはまらない

P

昨年度3月末→今年度4月当初
意識調査の結果に基づく課題分析・目標設定・取組計画策定

3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月

第1回調査
(小4～中2)

P

結果分析（「ア～エ」自分たちの見積もりとのズレの確認）



課題共有（教員同士の意見交流→学年）



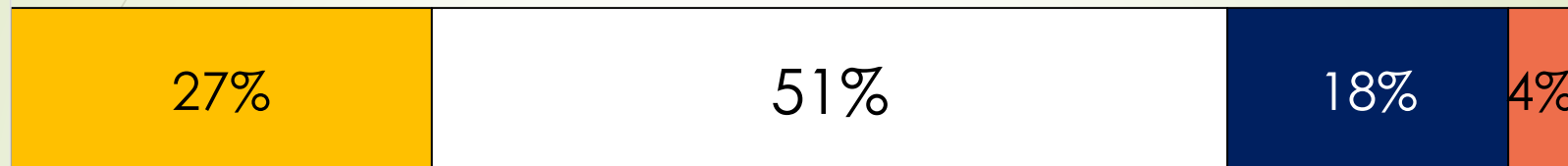
目標設定（「ア～エ」どれにこだわるのか、それはなぜか）



取組計画（既存の取組をいかす）

第1回調査
中1+中2
約5,500人

ウ 授業に主体的に取り組んでいる



H25.3

あてはまる
 どちらかといえばあてはまる
 どちらかといえばあてはまらない
 あてはまらない

意識調査の主たるターゲット

特定の子供・集団
 配慮を要する //
 リーダー的な //

ではない子供 (全体の6~7割?)
 = 「すべての子供」という表現でしか
 主役たりえない可能性のある子供たち



意識調査でわかること

「取組の先進性」 ×

「取組の浸透度」 ○

C / A / P

7月→8月 調査結果に基づく取組の点検と今後の取組内容の見直し

3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月

□

第1回調査
(小4～中2)

□

第2回
意識調査(小5～中3)



結果分析（自分たちの見積もりとのズレ）

- ▽ 課題分析は正しかったのか？
- ▽ 目標設定は具体的であったか？
- ▽ 浸透するような取組であったか？

C	A / P
---	-------------

7月→8月
調査結果に基づく取組の点検と今後の取組内容の見直し

3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月

□

□



第1回調査
(小4～中2)

第2回
意識調査(小5～中3)



居場所づくり

絆づくり

「居場所づくり」と「絆づくり」の違いを理解し、バランスよく取り組んだか。（ともすれば「居場所づくり」に偏る）

全ての児童生徒の
「心の居場所」
となる学校

そのために

教職員が、児童生徒が安心できる、自己存在感や充実感を感じられる場所を提供する
【安心安全な学校づくり】

全ての児童生徒の
「絆づくりの場」
となる学校

そのために

児童生徒が、主体的に取り組む活動を通し、自らが「絆」を感じ取り、紡いでいく
【場と機会の設定】

どの学校も、全ての児童生徒を対象に、毎日、居場所づくり・絆づくりに取り組んでいる。だから、取組は新しくなくてよい。

この研究は、その取組が本当に児童生徒の多くに届いているのか、教師の印象(エピソード)とのずれはないかを検証する方法、取組を見直す際の留意点(絆づくりの強化)の提案にある。

これまでの教育活動

検証 = 取組の浸透度

今後の教育活動

全ての児童生徒の
「心の居場所」
となる学校

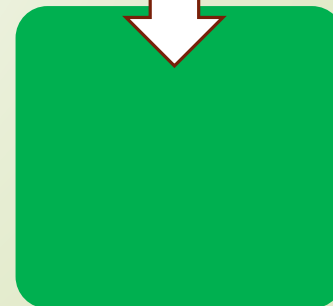
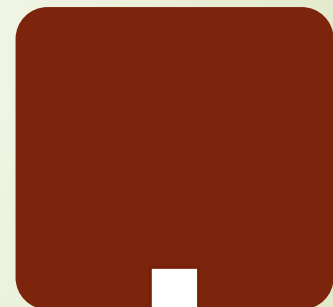
意識
調査

エピ
ソード

全ての児童生徒の
「絆づくりの場」
となる学校

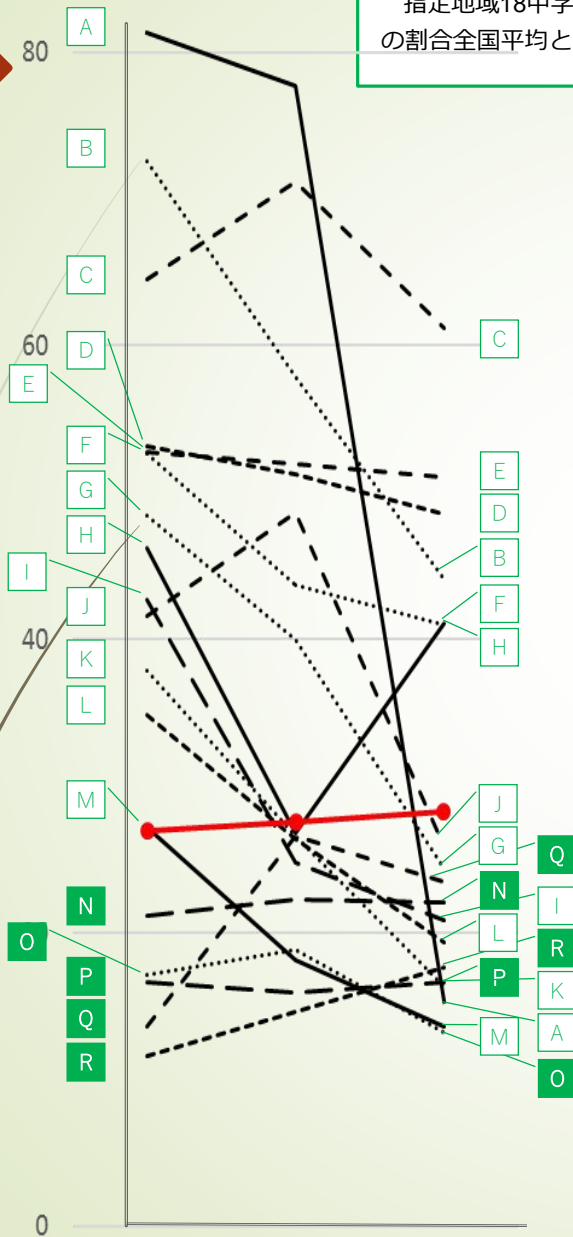
学年教員
による
数値目標

全ての児童生徒



不登校に関する成果

指定地域18中学校の不登校生徒
の割合全国平均との比較（千人率）



いじめに関する成果

H25-27年度末意識調査における
いじめの被害・加害状況の変容

表1 意識調査項目オ〜クの質問内容

オ	叩かれたり、けられたり、強く押されたりした（暴力を受けた）
力	暴力ではないが、いじわるをされたり、イヤな思いをさせられた
キ	叩いたり、けったり、強く押したりした（暴力をふるった）
ク	暴力ではないが、いじわるをしたり、イヤな思いをさせた

表2 オ〜クに「まったくない」と回答した児童生徒の割合の比較（％）

	第1回調査（25年度3月）					第4回調査（26年度3月）				
	小4	小5	小6	中1	中2	小5	小6	中1	中2	中3
	(3291)	(3226)	(3289)	(2727)	(2843)	(3248)	(3271)	(2821)	(2641)	(2783)
オ	65	66	70	73	80	70	77	77	80	86
力	58	62	66	71	75	63	71	72	76	84
キ	70	70	68	74	80	71	76	77	80	86
ク	68	69	69	74	78	71	75	78	81	85

表3 オ〜クに「まったくない」と回答した児童生徒の割合の比較（％）

	第4回調査（26年度3月）					第7回調査（27年度3月）				
	小4	小5	小6	中1	中2	小5	小6	中1	中2	中3
	(3116)	(3248)	(3271)	(2821)	(2641)	(2970)	(3156)	(2746)	(2749)	(2573)
オ	64	70	77	77	80	75	78	84	86	88
力	55	63	71	72	76	70	76	79	83	87
キ	71	71	76	77	80	77	78	84	87	88
ク	68	71	75	78	81	79	78	84	87	89

不登校児童生徒への支援に関する最終報告

(平成28年7月 不登校に関する調査研究協力者会議)

第5章 学校等における取組

1 「不登校が生じないような学校づくり等」

(1) 魅力あるよりよい学校づくり

学校における不登校への取組については、児童生徒が不登校になってからの事後的な取組に偏っているのではないかという指摘もある。児童生徒が不登校にならない、魅力ある学校づくりを目指すことが重要である。具体的には児童生徒にとって、「自己が大事にされているか」、「自分の存在を認識されていると感じることができるか、かつ精神的な充実感を得られる心の居場所となっているか」、さらに、「教師や友人との心の結び付きや信頼感の中で共同の活動を通して社会性を身に付けるきずなづくりの場となっているか」、「学校が児童生徒にとって大切な意味のある場となっているか」等について問い直すなど、魅力ある学校づくりを目指すことが求められている。全ての児童生徒にとって、学校が安心感・充実感が得られる活動の場であることが重要である。

いじめの防止等のための基本的な方針

平成25年10月11日 文部科学大臣決定(最終改定 平成29年3月14日)

7 いじめの防止等に関する基本的考え方

(1) いじめの防止

いじめは、どの子供にも、どの学校でも起こりうることを踏まえ、より根本的ないじめの問題克服のためには、全ての児童生徒を対象としたいじめの未然防止の観点が必要であり、全ての児童生徒を、いじめに向かわせることなく、心の通う対人関係を構築できる社会性のある大人へと育み、いじめを生まない土壌をつくるために、関係者が一体となった継続的な取組が必要である。

このため、学校の教育活動全体を通じ、全ての児童生徒に「いじめは決して許されない」ことへの理解を促し、児童生徒の豊かな情操や道徳心、自分の存在と他人の存在を等しく認め、お互いの人格を尊重し合える態度など、心の通う人間関係を構築する能力の素地養うことが必要である。また、いじめの背景にあるストレス等の要因着目し、その改善を図り、ストレスに適切対処できる力を育む観点が必要である。加えて、全ての児童生徒が安心でき、自己有用感や充実を感じられる学校生活づくりも未然防止の観点から重要である。